

浄土

1981-1

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別送達郵便物）第三二五号
昭和五十五年十二月二十五日印刷 昭和五十六年一月一日発行
第四十七卷 第一号



光 白 色 白

—『阿弥陀経』より—

大本山金戒光明寺法主

稲岡 覚 順

大本山金戒光明寺法主
稲岡 覚 順



光 白 色 白

正月号



もし念仏三昧の醍醐の薬にあらざれば、五逆深重の病はなほだ治しがたしとす。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 p.151)

目次

——〈年頭所感〉——

賜わりたる命

——法然上人のご生誕に学ぶ——林 靈 法……(2)

——法 話——

新年への期待……野 島 宣 道……(8)

〈年頭所感〉

新しき年を迎えて……藤 井 実 応 ……(12)

白色白光……稲 岡 覚 順 ……(14)

声なき老翁(おいぼれ)のお念仏……宮 本 文 哲 ……(16)

青年僧に期待する……石 井 真 峯 ……(17)

(連)(載)(法)(話) 第四回

利益を願う心……小布施 弘 学……(22)

〈連載〉

アンコール・ワットSOS(一)

——アンコール遺跡調査報告——石 沢 良 昭 ……(28)

浄土句集……一 田 牛 畝 選……(26)

〈表紙のことば〉御 慶……土 屋 正 男……(20)

〈表紙裏・巻頭色紙〉ニ白色白光ニ……稲 岡 覚 順

念仏ひじり三国志⑧——法然をめぐる人々……寺 内 大 吉……(33)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部



賜 わ り た る 命

— 法然上人のご生誕に学ぶ —

大本山百万遍知恩寺法主

林 はやし

霊 れい

法 ほう

一、家庭教育における親の姿勢

法然上人の御誕生にあたりては、御両親が神仏に願いをこめ、特に母親秦氏は酒肉五辛を断ち、ひたすらに仏を念ぜられたという。生まれてくる子供にとりて、親の精神衛生がどれほど大切であるかということ、最近に

は精神医学の立場からも明らかにせられているが、わが国ではすでに胎教というものがあって、親のこころを整えることの大切さを説いてきているのである。神仏に祈願したから子供が授かったというのではない。授かるときもあり、授からぬときもあることだろう。要は生まれてくる子供の一つの命を、親がどのような心の姿勢でこれを受けとるかということである。一つの命を天地より、み仏より賜わりたるものとして受けとるところに、子供のその成長に極めて大切な尊い意味があるということである。

私は去る日、婦人会の講演依頼で会場に参り、控室でしばらく時間のくるのを待っていた。部屋のかたすみの方で、幹部の婦人数名が頭をあつめて雑談をせられていた。そのお話が偶然に聞えてきたのである。「とうとう出来てしまったの」「馬鹿ね、あんた、あれほど言っただけなのに」「でも仕方ないのよ、出来てしまったから」このような話のやりとりがしばらくつづいていたのである。自然に聞えていた私は、非常に不愉快な思いをしていたのである。今日の私の講演は、家庭教育における親の大事な姿勢についてお話をいたすのであったが、このような自分の子供に対する母親の姿勢が、いまの日本の家庭における一般であるとするならば、家庭における親子の問題、非行から暴力の問題等、これらの問題の解決にはまことに道が遠いことを痛感されたのである。

人間の命を、いまだでは親が勝手に生む、またやめたという、まるで木の切れはしでも造るような単純な考え方に陥ちて平気でいるのである。だから生まれてきたわが子は母親の全くの私有物ということになる。いまの日本の家庭では子供の教育に対しては、一般的に言って父親は先ず權威はなくなってしまう。ただ母親がわが子に対しては、生物学的次元においてべつたりの姿勢で、自分の思うように指導して造りあげようとする。今日の母親の熱意とあせりと偏狭な指導が、子供らの尊い命をすべて一方的に盆栽教育の方向にひきずりこんで行くのである。やがて、野生的で勇氣のある感情ゆたかな人間に成長するのではなくて、機械のはしくれの如き無感傷なロボット的な人間に造りあげられて行くのである。

母親のことであるから、わが子に対する愛情の深さは当然のことであるのだが、それが単に生物学的次元のも

のでしかなくところに誤りがある。そこに親の利己的な性急な愛情が、やがて尊い天与の命を殺して行くことにもなる。

二、わが命、地球より重し

先ず、一つの命がこの地球上に生まれ出るまでにこの天地自然、そして、人間社会が、どんなに尊い献身のたらしきをささげているかを思うべきである。科学者の説くところによれば、この地球が出来て冷たくなってから今日まで、四十六億年の長い経過であるという。最初十億年は物質だけの化学進化の時代だ。それから偶然のよき機会にこの地球上に生きものの原形となるものが生まれ、それから生物進化の歴史が始まった。これが三十六億年の長い間で、その果てに今日の文明の人間が生まれるところまで発展してきた。この間、実に長い経過である。地球が出来てからでも気の遠くなるような話であるが、更に地球がとび散って生まれる太陽系全体からすれば、今日まではまことに無限の彼方からの時間の経過である。この長い間の営々たる自然界、生物界の進化発展の結果に、人間の命は、今日生まれ出ることを得ている。だから、一つの生命がこの世に生まれるためには、その背景にこのような無限の歴史的背景のはたらしきを思うべきである。私がここにあるためには、両親が先きに生きており、その両親たる父母の系統には、夫々また両親の系統が遡ってつづき、かくて無限の彼方につづいていく。しかも、この無限にまでつづく長い間、生きものは、自然界からの食べものを受けてこそ進化発展をなしとげている。

そこで、この永遠の彼方から、数えきれぬ無限無量のすべてのお育ての関係、即ち縁がすべて全うせられてこそ、只今私はここに人間としての尊い一つの生命を受け得ているのである。この長い間どこかで一つの縁を欠く

とか結び方がまちがえば、只今ここに人間としての生を受けることが出来なかったであらう。すべては天地社会の永遠からの長い長いお育ての上に、只今の自分の命を受けているのである。実にわが命地球より重しである。だから、親が勝手に子供の命をつくる、やめるものではないのである。すべては賜わりたる命として受けとることが、本当の姿勢と言えるのである。子供の躾けや教育についてやかましく言うよりも、先ず親自身が自分の子供の命に対する正しい姿勢を持つこと、即ち親自身が自分の人生に対して正しく生きていく姿勢をつくることである。だまって親の正しい生き方を子供に見せていくことである。

三、世の中の不幸をわが身に背負う

近頃非常に感動した事実を述べておこう。私の名古屋の自坊の幼稚園に五月になってから、二十八、九歳の若い母親が五歳の男子をつれて入園を依頼された。入園は大体前年の十二月にきまる。余りにおそいのでわけをきくと、この子供は五歳の聾啞の子であった。親の切なる願いとして、せめて普通の子供と週一日でもよいから、教室の片隅においてもらえぬかという。ところが、その若い母親はきわめて明るいすがたである。

先ず、このような不幸な子供をもった親は、話しかけるともう涙ぐんでいるのが普通であるのに、そんな母親に見られぬ実にも明るいのである。余り障害が多いので、一応専門の医者と相談したたが、矢張り特殊の施設の方が子供のためだということで、園ではあずからないこととなった。私は不思議であった。この若い母親にはこうした不幸な子供をもつ暗さが微塵だになく、全く明るさを失っていられたのである。私はそこで率直にいろいろと事情を伺い、近所の方にも伺ったが、近所の方々はあのお二人の親には本当に頭が下がると言われていた。事情はこうであった。

わが子供が二歳になっても、ものを言わず、それにどうも耳がきこえぬということで、始めて親はあわて出した。四方八方に医師を頼って、いろいろと東京方面の医師にも見てもらったが、聾啞はなおる見込みがなかった。そこに待っていたのは、さまざま迷信であった。溺れる者はわらでもつかもうとする。そちこち走り廻って奇蹟を待ったが駄目であった。さあ、そうした苦しい長い日々がつづいた。その間、母親は夜おそく家を出て、電車の線路にとびこんで自殺を二度三度とはかった。しかし、夜路の自分のうしろに見えかくれについて来る主人のすがたを見て、死ぬことも出来なかった。

このような絶望の中にぐったり坐りこんでしまったとき、しずかに岡山の里の母親の言葉がきこえてきたというのである。ときおりこちらにくる度ごとに、里の母親（主人の親）は、このように若い夫婦に言っていた。「お前たちのところに生まれてきた子供はな。世の中の沢山な不幸を自分ひとりに背負うて、お前方のところに出来たのだよ。どこかに出るはずの不幸を自分に受けてきたのだよ。大事にしてやりなされ。せめてお前方があれを大切にしてやらなければ、それこそ可愛想なことだよ。そして、あれをな、大切にして生涯つくしてやって行くことが、今度はきつとお前方が救われて行くことになるよ」この言葉であった。

岡山なる里の六十の母親は、すばらしい念仏者であった。このような受けとり方は、まさに念仏者の生きる強い姿勢を示すものであった。そこで、二人はこの母親の言葉の意味について、夜を徹して話し合い、また考えられたというのである。

四、世の不幸を荷負して行ける力

この言葉の中の意味は中々にむづかしいものである。それが若い夫婦には中々と受けとられにくいことは当然

である。自分らが別に悪いこともしないのに、なぜこのような不幸を背負うて行かねばならぬかということである。この愚痴、不平の出ることは当然なことである。世間の常識からすれば、誰でも訴えたいことである。

しかも、たのみもしないのに、こうした不幸な子供を私たちに賜わりたるものとして受けとれ、と母親は論じているのである。とても納得のいきかねるむづかしい贈りものである。しかし、これをどのように受けとることの出来るのは、ただ念仏の信仰からして、始めて出来ることである。わが身にふりかかる世の不幸や禍いを、だまって私に賜わりたるものとして受けて行く素直さ、そして勇氣、そしてやがてはそこからこの自分自身が救われて行くということ、これこそ念仏者にも出来る道であったのだ。念仏とは身にかかるいかなる逆縁逆境をも素直に受け、またこれを通して、やがてこの私自身が大きく救われて行く道であったのである。

若い両親は長い苦悩の果てに、おぼろげに母親の言葉がわかるようになったのである。この不幸な子供は、私たちを鍛えてくれる菩薩さまとして、私共のところにきてくれたのである。愚痴や不平は常識として親の言い草である。この子供は自分たち親に本当の人間道、親の道を教えにきてくれたものである。ようやく段々に心が落ちついて行った。やがて、生涯かけてこの子供に奉仕する決心がついて行ったとき、親の気持ちはいくらもとは百八十度の転廻となってすっかり変わって行ったのである。そこに全く想像もつかぬ明るさが出てきて、子供に奉仕することに全くの生きがいを感じとって行くことが出来るようになった。

世のいわゆる常識の世界に埋没して、世間の幸不幸に右往左往して泣いたり笑ったりする。それも人間の一生であるが、人生の奥底に宿されたる無価の宝を見ることは出来ない。いかに世間からは不幸なすがたに見ゆるとも、苦境を通してこそ、真実のよろこびが与えられる。念仏はまことに無碍の一道である。人生のいかなる苦難をも荷負せしめて行く力である。転悪成善、必ずそこに光ある真生を生み出して行くものである。

今私は、あの若い両親が近い将来に不幸なわが子のすがたを通して、自分の身に大きな人生の光とよろこびとを大きく受けとられていくことを願っているのである。



新年への期待

野^の島^{じま}宣^{せん}道^{どう}

心血をそそぐという言葉をいくたびも聞いて来た。別に不思議に思ひもしなかった。一生懸命にやることだと思っただけだった。

新年を迎える感想の言葉にもよくつかわれている。「今年こそは、私に与えられたこの仕事に心血を注いでやる覚悟であります」という風に。

新年が来ると、家庭の中も、世の中も急に容姿を変えらる。一夜の変貌である。

平素だらしない家庭でも、一夜明けると、「いろいろお世話になりました。本年もどうぞよろしく」など、まるでとってつけたようなこと言うのである。それで、

結構、新年らしい気持になるのである。昨日の鬼が礼に来るなどと、昔の人も、この変り方を諷刺している。特に、人間が集って共に働いている所では一層これが目立つのである。新年というものは、存在するもろもろの上に蔽そかというヴェールを着せかけるのである。

そして特に人間はヴェールを被ると、平素見失っている真面目な人生への期待がよみがえるかのようである。社長が社員に対する新年への期待の言葉。即ち上司が下僚に告げる新年への期待の言葉。又、有名人の新春感想などは、元旦に、どっと来る新聞や年賀状に、いやという程記載されている。そしていつの新年所感の言葉も飾

り言葉の満載であることに変わりはない。

たくさんさんのテレビ番組の中の一つに、司会者が足早にステージに出て来るなり、「みなさん言葉は文化である。さあ、その言葉の文化を大いにもてあそんで頂きましょう」と言うのがある。私は何度かそれをきいて、判ったようなわからぬような気がするのである。大いにもてあそぶ言葉の文化というのが、そのもてあそぶというのがどうも引かかるのである。文化の未だ開けない昔の人にも言葉はあった。その頃の言葉と現代の言葉と、言葉は著しく変っているが、その意味は同じ流れに沿っている。そして言葉は、相互の意志を伝えるために、苦勞して開発して来たものであると思うのである。自分の意志を他の人に伝えるということは大変なことである。今でこそ滔々と弁ずることが出来るが、最初はどうであったろうか。意志を伝えようとしても、相手が解ってくれなければ、さぞ、もどかしいであろう。又、腹も立つであろう。幾たびも苦勞の末に、誰となくぼつりぼつりと一人が開発したものが、他の人々の同調を得て、ついに大衆化し、一般化したのであろう。だから言葉が言葉として育つ以前は必死であったにちがいない。手真似、

足真似、嬌音、奇声の連発であったとおもう。現在の野生動物のそのように。

心血を注ぐということを初めに言ったが、心血という血はどんな血なのであろうか。

肉体の血は、身体を巡って生命を与えている。自分の命はこの真紅の血の流れによって授かっている。からだはそれによって生きるであらう。だが、そのからだを支配するもう一つの自分がある。心である。見えるものではないが活殺自在の力をもっている。さて、野生人間の時代に人々はこの心の存在がわかっていたであらうか。わからないまま、この心の思いを他に伝えようとしたのでないか。心血を注ぐというのは、その頃の人々が、言葉以前の言葉を誰にも通じる言葉に造ろうとして苦心慘胆していた状態を、心血を注ぐと表現したのではないかと思えてならぬ。無論私の独断である。イタリヤにはイタリヤの語があり、イギリスにはイギリスの言葉がある。それは、夫々の集団において、その集団の中の人々が、互の心を通じさせたいために造り出したもので、他の集団の人々には関係がない。その集団の中の人々の間のみ発達して来たのである。夫々の集団で用いられて

いる言葉、それはその集団の人々にはこの上もない宝であらう。訛というものを方言ともいう、そこにのみある発声法である。祖先の心血を注いだ遺物であり、無形の遺産である。これほど貴いものはあるまい。文化がこれを履きちがえて標準語という名を付けた言葉がある、然し標準語で、歌舞伎は出来ないし民謡も影を失うであらう。文化が発達することによって、歌舞伎、民謡が愈々忘れられない心の古里といわれている。なぜだろう、方言、訛の中には先人の心血が流れている。文化として扱われた言葉はもてあそばされている現代である。

二度とない明日の人生への期待を語る時でさえも、心にもなき美辭麗句を並べるが、即ち文化をもてあそんでいるのではなからうか。

長い人生を超えて来た者にとって、行く年来る年ということは重大なことである。有りし今年は行くのである。来る年といっても明日が確かならぬ者に取っては、あるやらないやらわからぬ。その来年を迎えることが出来るというなら大変なことである。単に新年おめでとうだけではすまされない。手も届かぬ所の空想めいた言葉をならべて、新年の祝辞とし、リクレーションめいた新

年の迎え方をしている余裕はない。一日一日今日を限りの我が命なのである。豈、心血を注がざらんやである。原稿を一行書く時間だけ、おのが命は消されているのである。文字を言葉をもてあそぶどころではない。

ほんとに人生の真実を踏まえておられる人々は、たかぶらず誇らず、それは生死無常の鉄則を知っているからである。この前には、人爵も、位階も、名声も皆無力である、誰人にもならぬものである。ともに凡夫のみである。

新年への期待を、職業奉仕、友愛に生きることと申された話をきいた時、立派だと思った。拍手を惜しまなかった。

買手よろこび、売手満足する。新しい年を迎えて、この職業奉仕を期待しているという。立派な抱負である。しかしこの立派な抱負にも壁があつて、期待の通りにはならないことが残念である。

その壁というのは我の存在である。期待の通りに現実が参らないのは、自我というものが時々顔を出すからである。「それではわしが損をする」とか。おもわくちがいったとかで、所詮立派な抱負も我が邪魔をして空転

に終ることが多いのである。慾も得も忘れて、立派な期待を充実させることは、むづかしいことである。

私の座右に俳誌が各種ある。文化が発達すると言葉も豊富になる。それでかどうかはわからぬが、わざわざ言葉をもてあそんでいるかに見えるものが目に付くようになって来た。

あともどりせざる五月の富士に逢ふ

苗ながらどこかが茄子といふ感じ

身もだえる風に冷静告げる絲

これらは一寸頁をめくって、目についた二、三の句であるが、別にこれらの句が言葉文化をもてあそんでいるというつもりはないが、昔の人々が、言葉の文化は乏しかったが、言葉をつくらわず、工夫もせず、それでいて天真爛漫の言葉を心血から吐き出しているのを見ると、じんと来るものがあって共感を伴うのである。

元朝や貧しけれども父母在ます

城守の仕事はじめは城案内

福笹に所詮かなわぬ願ひかな

これらの句にも、新年への期待がある。

餅花を吊すも吾のある限り

世のこともただ聞きながし春火燵

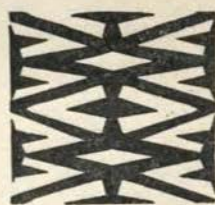
期待はあるが我が手の届かぬものをめざして言葉の遊びをやっているのに比べて、これらの句は小さい期待と願ひではあるが、かなわぬようなものではない。言葉の文化をもてあそんでいる句いはどこにもない。

後世に名をのこした小林一茶が、本来の人間として見得を張らず、特に子の親として、願ひのままに心血のほとばしる率直な一句、新年へかけた期待の一句。凡夫の願ひとしていつわりのない深情をぶちまけた一句、私はすばらしいと思うて愛誦している。

今日よりは二つになるぞ這へ笑へ

一茶

一茶の新年への期待である。



新しき年を迎えて

大本山増上寺法主

藤井実応
ふじ い じつ おう

善導大師一千三百年遠忌の年を送って、法然上人降誕八百五十年の前年を迎えることとなった。遠忌の年は終ったが、われらはこれを出発点として、釈尊・善導・法然、三国三代相承のみ教えをよく体して、われひと共に仏道に精進いたしたい。

三国三代と申すように、インドに釈迦牟尼世尊あれまして、生きとし生ける者みな仏性あり、誰でも仏道を成

ずることができ——真人生にめざめ真に生きゆく道を教えたもうた。中国に善導大師あらわれて、釈尊の正意を明らかにし純正浄土教を広めたまい、わが国において法然上人、釈尊・善導の元意を会得して、選択本願念仏のみ教えを広めたもうた。私共はインドの釈尊、中国の善導、日本の法然と、三国三代に相承せられてきたその法門にあらうことができたのである。

現在、浄土教の実際を反省してみると、高祖・善導、宗祖・法然のみ教えは、教学の方面にも布教の実際にも深く研究され実践されてきた。しかし、教祖・釈尊については、高祖、宗祖の教学に比しておろそかになっているのではなからうか。いうまでもなく高祖も、宗祖も、常に釈尊のおことばを引用し、仏祖の正意を開顕せんとされてきた。わが恩師・椎尾弁匡先生はじめ、近代の高僧方は、みな釈尊のみ教えを明らかにせんとし、研究をし実践もされてきた。また現代の仏教学者によって釈尊伝、原始仏教の研究が一層進められている。

われら浄土教徒として、今日までの研究をもととし、さらに歩を進めて、教学の上にも、布教の実際にも、浄土教が釈尊の正意正統なることを明らかにしてゆかねばならぬ。

つぎに、昨年は善導大師のご遠忌とて、国内はいうまでもなく、中国・香積寺においては、日中共同の善導大師一千三百年遠忌大法要が修せられ、彼の国の仏蹟参拝団も多くなり（各宗とも）日中仏教徒の親密交流が進められた。また、ダライラマ法王が増上寺をはじめ各山、広島原爆平和塔などへ参拝、講話、会談が行われた。

また増上寺にては、団体を編成し、スリランカ大統領を表敬訪問、タイ国ブーン妃殿下（世界仏教徒平和会議長）を表敬訪問、ついでスリランカ首相や同国駐日大使、大菩提会長ら同国国會議員らの増上寺参拝、会談が行われた。遠忌を通して、ハワイ、米本国、ブラジル、欧州など仏教徒の往来、その他、日本仏教徒としてカンボジア難民の救済運動、また学問、教育方面の国際的交流、研究、調査が進められた。仏教徒のみならず、世界各宗教間に往来交流、研究、調査、提携が行われてきた。世界は一つになりつつあり、その方面を進めて、平和世界、福祉社会のために尽くすところがあればならぬ。

同時に脚下の一步充実を忘れてはならない。昨年は中学生の暴力事件、大学受験浪人の親殺し事件、青少年の補導件数戦後最高、また非行中年の現実など（外にはイラン・イラクの紛争長びくとか、ポーランドの問題など）悲しき報道に接し、仏教者として懺悔しつつ年を送ることとなり、やがて宗祖の誕生八百五〇年を迎えることになることは、そこにまことに意義深きものあることを感ずるのである。

かかる時、宗祖の伝記、特に幼少年、青年時代のこと

から学ぶべき教えが多い。

宗祖の両親は、長い間、子なきことをなげき、夫婦心を一にし（夫婦道）仏神に祈り申すに……懐妊す（申し子の思想、子は仏神より授け頂くのである）。酒肉五辛をたち、三宝に帰する心深し（胎殺の重要性）。幼童の頃、西の壁に向って拝むくせあり（拜む教育、宗教情緒の涵養）、九歳、父の偉大なる遺言（父の遺言わすれがたくして云々）。十三歳登山出家（出家の意義）、十八歳隱遁（第二の出家）

等々の教えは、念仏の信をとおして現代人として特に学びゆくべき道であると思う。

要は脚下の一步を忘れず、おのおの分に随い、念仏の信を明らかにし、身に即（つ）けてゆくことである。同時に「有縁の人々に対しては身命財を惜まず法を説かん、若し一人にても苦を捨て、生死を出る者を得れば、是れ真の仏恩を報ずるの道なり」の祖訓を仰ぎ、懺悔、捨身、精進せんことを願うのである。



白色白光

大本山金戒光明寺法主

稲 いな

岡 おか

覚 かく

順 じゆん

白光あり、微妙香潔なり」

「池の中に蓮華あり。大きさ車輪のごとし、青色には青光あり、黄色には黄光あり、赤色には赤光あり、白色

これは、有名な『阿弥陀經』の一節である。

「七宝の宮殿^{きやうど}樓閣^{ろうかく}鬱蒼^{うつそう}たる樹林、花咲き鳥歌い、微妙の音楽の響く世界」

『阿弥陀經』では極楽の世界を説いて余すところがない。

そこには一個の死物もなく、一片の汚染もない。正しく大清浄、大光明にみちた、完全大調和の生命世界がある。

特にこの池に咲く蓮華、青黄赤白と色彩は異なるけれど、互に競うこともなく張り合うこともなく、赤色は赤光を白色は白光を、それぞれ天与の持分を精一杯發揮しながら、しかも前後左右の調和を保ちながら、美しくも咲き出でた妙華である。

何という謙虚にして純真な姿であらう。正しく分担協調の二辺を宅して咲かせた微妙香潔の姿である。

この『阿弥陀經』所説の生命世界は、遠い彼方の世界として終らせてはならない。

われ等の住むこの地上社会は、唯物に生きる無信仰の輩には、瓦礫の世界、公害汚染の五濁惡世と見えるであらう。しかし一度宗教的廻心に立った、信仰開眠の人々には、そのまま本願成就の報身報土と拝むことができるのである。

春夏秋冬、日月星辰の運行時を違えぬ、この完全大調和の生命世界こそ、法蔵菩薩が兆載永劫の苦行の結果、かちとり給ひし報身報土であり、一草一木の動きにも、われを育み生かし給う、願力を頂くことができる。

無心の大地から同じ条件で育ちながら、青い瓜、黄いバナナ、赤いトマト、白い大根と、それぞれが独自の特性を生かしながら、無言の中に全力をつくしてくる尊い姿の中に、白色白光の教えを頂くのである。

極楽は決して彼方の世界ではなくて、今ここに、私の足もとに展開している光景である。

地上の森羅万象の悉くが、この白色白光の実践世界であることに気がつく時、私共人間もまた、この天地の意志、弥陀の願力に順応し、この地上から死物を除き汚染を払い、より明るく清き生命世界充実のために、一層の精進努力をかたむけねばならない。



声なき老翁のお念仏

おいぼれ

大本山善導寺法主
宮本文哲

みやもと

もと

ぶん

てつ

私は何の因果か、去る昭和四十五年八月二十四日、久留米医大病院で声帯剔除の手術を受け、生れもつかぬ啞になりました。読経や布教が本職の坊さんから、声をとりあげてしまうなんて実にむごい事です。「歌を忘れたカナリアは」どころの騒ぎではありません。その煩悶苦悩は本人のみぞ知るで、到底筆紙に尽し難しであります。夜は眠れず、食は進まず手術前六十五キロあった体重は、五十五キロに減り、一時は絶望の余り死神に誘われなかった事もあります。然し宗教家として何と言う腐甲斐ない事かと、心気一転総ては前世の宿業と諦めて、自刈りとする覚悟をきめ、発声練習に励んだのであります。

す。幸いに森田看護婦の指導よろしきを得て、今では人工喉頭器で寺役だけは、どうにか果せる様になりました。私は手術を受ける前喉が悪いので、久留米医大病院で一カ月ほど養生しましたが、少しも治らないある晩のこと、突然森田看護婦の訪問を受けました。そのわけは次の通りであります。

私(森田)が今晚突然お伺いしたのは広戸先生の命令であります。それは貴方に手術をすすめる事です。と詳細に内容話をしてくれました。私は夜中遠い道をわざわざ来てくれたその労を謝し、且つ手術をうける事を承諾しました。以上が私が生れもつかぬ啞になった原因です。

が、それにつけて思い出すのは同窓の友里見達雄君の他界です。里見君は宗大在学中は私より二級下だったと思います、姓も田崎と言いました。優秀な宗政家で、浄土宗は勿論日本仏教界の為に大いに尽された人です。全く惜しい人を早く他界させたものです。それにつけて私の主治医広戸博士のある日の話を思い出します。博士曰く、喉頭癌はどの程度にまで進んでおるかがこの眼ではつきりと見えますので、この位ならコバルトで治るとか、一方の声帯だけ取れば治るとか、或は声帯を両方共切り取らなければならないとかが手術の前に判断出来る

のです。腹を切ってみなければわからないという胃癌とは違うのです。診察の結果、これなら治るといふ確信の下に手術をするのです云々と。私は今その話を思い出して、同窓の友里見君の死を痛んで居ます。

私想うに、同君が余りに優秀な宗政家だったから、切開手術が事務多忙の為、手おくれになったのではないかと思います。

尚新年御目度は大徳各位に申上げて、欄筆致します。

合掌

青年僧に期待する



大本山光明寺法主

石^{いし}井^い真^{しん}峯^{ほう}

昨年十一月の初めは私にとって大変意義の深い時だった。第一に神奈川仏教青年会会員三名の来訪を受けた。

三人とも他宗のかただった。第二は浄土宗豊島組青年会から「浄土宗を考える」という書籍を送って頂いた。第

三に、福岡県飯塚市真福寺内全国浄土宗青年会事務局から、宗務総長宛の要望書を送って頂いた。時を同じくして、青年僧から来訪を受け、また文書を届けて頂いたことは不思議なことである。有為な青年諸師が将来の仏教、特に浄土宗に関心を持っておられることが考えられ、たのしかった。

初めに来訪して下さった他宗の青年たちには、来意もよく聞かないで、日本仏教の現状に対する私の考えを尋ねに来られたものと早合点して、残念ながら、現状には満足していない。法要も、何を読んでいるか解らない。お経の捧読みだけでは時代おくれであろう。法要後特別の場合を除いては、短かい法話をするのが望ましい。今日の日本仏教に最も欠けているものは布教ではあるまいか。そして吾々自身の日常生活も他の人の模範となるよう願っている——というようなことを話したのである。

このようなことから、更に欲を言えば、私は年頭に際して、次のようなことも提言したいわけである。

毎日曜日などに法話の会を持ちたいが、なかなか人が集まらない。私自身のことはいくいが、私は若い時

|| 新刊 ||

総本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺大本願

布教師 小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者小布施師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。

すでに三版を重ねて、好評発売中。

B 6判 二四〇頁 価一五〇〇円

(千一六〇円)

(申し込み先)

〒 381-12

長野市松代町東寺尾三八八一

長 明 寺

振替(長野) 一四三二二

英語を専攻したので、これを利用して毎週土曜日午後一時
間半、「仏教英語と英会話の会」を開催している。英文
の仏教書を印刷して会員に渡し、やさしい仏教の講義を
しているが、すべて無料である。英会話は今はやりであ
るから、会話本を使用して行っている。英会話本も無料
で配布するつもりだったが、只で貰った本は粗末にする
ものだから、本代は貰った方がいいという意見があった
ので実費を頂戴している。英会話は、人を集める手段の
つもりである。

仏教寺院のご住職には書道にすぐれた方も多いと思
う。書道塾を開くこともよい。すでにそういうことは広
く行われているであろう。夫人の中にも生花、裁縫、編
み物等々の特技を持っている方も多かるう。その活用を
希望する。月謝は頂いて差支えないではないか。

次は毎月のハガキ伝道である。これも有力な伝道にな

るが、近くハガキ代も値上げされるらしく困ったこと
である。余りむづかしいこと、仏教語の使い過ぎは敬遠さ
れる。

次に実行しないのは揭示伝道である。効果は大きい
が、書く文章の選択に苦勞する。

豊島組青年会の「浄土宗を考える」にも共鳴するところが多い。

最後の宗務への「要望書」も有難く読んだ。「各寺の
住職がもっと頑張って布教活動をすれば浄土宗は発展す
るだろうという指導であり、認識である」とあるが、同
感である。

ともかく、新しい年に向けて、青年諸師のご健闘を祈
る。

合掌

年 頭

所 感

表紙のことば

「御 慶」

明けましておめでとうございます。

お目出度い正月には兎にも角にも松竹梅。
慶事にはまず松竹梅が欠かせぬシンボルのようになっている。

寒中にもなお緑をたたえている松、竹に、
春にさがけてはだかの枝に花開く梅を配し、
「歳寒三友」とてその清節を尚美したのは宋
元の頃からで、我国にもすでに鎌倉時代に入
っていると謂われている。

この異国からの好尚も時代が下って町人文
化の発達した頃になると、一般民衆の中にも
浸透して豪華な衣裳に、什器に、その他もろ
もろの文様として美しく取り入れられ、生活
の中にいつか深く染みこんで、本家の中国よ

土屋 正男

りも、もつとも日本的な匂いの強い文様とし
て、お目出度いシンボルに欠かせない程に密
着してしまったのは面白いと思う。

それも今日ではいささか鼻につく程で、酒
の名には松竹梅、お線香にも松竹梅、結婚式
場のランク別にまでも使われているからには、
議員さんの収納帳のランクにも目出度く使わ
れていることかも知れない。

そんな俗っぽい図柄が、果して『浄土』の
表紙に相応しいものだろうかと思ひ疑してみた
が、俗の俗なのが正月の目出度さならば、俗
に遊ぶのも表紙の役目ときめこんで、御題の
音をちょっぴり聞かせ、末広がりに松竹梅と
目出度くお飾り申し上げます。

◎『浄土』表紙版画販売についての「案内

新年あけましておめでとうございます。

本年もまた、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、土屋正男先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の正月号より十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七



連載法話

第四回

利益を願う心

おふせ こう がく
小布施 弘学

(長野市長明寺住職)

私は或る人から頂いた葉書の隅にしるされた左の一首の歌に強い衝撃を覚えた。

願ひこと 祈りたきこと 持て来しに

額^{ぬか}づけば ふと 無心にかへる

信仰心が純一無雑でなければならぬことを、実に簡潔に歌い上げているのである。

私達の信仰は、日々の生活と遊離したものであってはならないが、飽くまでも一線を区切って、混同してならないものがある。

それは、祈り、願いの持ち方である。私達の社会生活

は、損得勘定、利害得失に明けくれているが、ために、その感情が、信仰の世界に持ちこまれて、神仏に合掌すれば、すぐ自己の利益を願うのである。私達が幸せでありたいと願ひ、神仏に祈る気持ちは人間の当然な感情かも知れない。然しながら、娑婆世界に生きる凡夫が神仏に祈ったからと云ってその願ひ通りに事が運ぶものであろうか。

もしも、祈ることによって、自分の希望通りになれば、ご機嫌さんになって、その神仏に対し、薬の効目のように宣伝し、願ひが成就されなければ、神仏を誹謗す

るとしたら、それが真実の信仰と云い得るであらうか。

かの菅原道実は、

心だに 誠の道に 叶いなば

祈らずとても 神や守らん

と詠っているが、神に向う心に、虚仮飾りなく、誠の道に叶ったなら、こと改めて神に対し、いろいろな利益を請求しなくとも、神は必ず守ってくれるに違いない。利益というものは人間が神より獲得しようとするものではなく神より授けられるべきものである。そして授けられるためには、おのれ自身が誠の道を歩むことが先決である。

請求しなければ相手に通じないと思うことは、宗教を正しく理解していない証拠である。何故ならば、請求の必要は、相対的関係の人間社会に於いてのみ認められるものである。

云わなければ相手に通じないということは、お互い人間は飽くまでも、他人の心奥をうかがい知することは出来ないからである。だからそこには、意志を言葉で表わすか、態度で示すことが必要である。

然し、宗教の世界は、人と神、凡夫と仏の絶対関係で

あるから、私達人間の心の奥底まで総て承知されている神や仏に対し、請求することは、笑止の沙汰であり、絶对者への冒瀆であると云わざるを得ない。然し、それは正当なる理論であって、弱い人間は、苦悩にあえぐとき、神仏に祈らずにはおれないではないかと反論することも出来ない現実である。祈らなくとも良いと云われると、そこに「大丈夫だろうか」との不安が起きてくる。

これも人間としての当然な感情であらう。然し、正当なる理論を曲げて妥協は許されない。この私達の危惧を晴らしてくれるものが、法然上人の説いた「不求自得」——求めずして自ら得るといふ教理である。汚れた布類を洗濯しているうちに、格別にきれいにしようと願わなくとも、両手が美しくなる。手をきれいにする目的で洗濯するものはない。神仏に無心（誠）になつて合掌するならば、特に、いろいろな利益を請求しなくとも、神仏は私達を見捨てることなく守って下さるに違いない。

人間的な祈りの心の虚しさを知ることが、正しい信仰心の把握である。総て神仏にまかせ切つてこだわらぬことが肝要である。

念仏を称える目標を、法然上人はその遺言状（一枚起

請文」のなかに、「唯往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して疑いなく、往生するぞと思ひとりて、申すほかには別の仔細候はず」と訓している。願往生の心が、誠一筋に向けられていけば、現世の救済（利益）はおのづから具足すると受け取ることが善導大師の云われる「此世及往生、願仏常摂受」此の世及び後の世共に、仏に授受（救い）される一の教えである。

ここに於いて、注意すべきことは、前述の「思ひとりて」は自己一人の願往生の心決定ではない。思いとった心は、三心具足、（至誠心、深心、廻向発願心）即ち、誠信に信じてただ一筋の状態であるから、無我、無心の境地であって、自分一人の往生や、現世の利益を毫も願わぬ、純一にして無給の信である。この信はおのれが発すものでなく、仏より賜わりたる心である。

法然上人の教義信条のきわまるころ、浄土宗の血脈は「心存助給、口称南無阿弥陀仏」であるが、心に助け給えと存念することは、私一人の救済を頼むものではなく、衆生と共に往生せんと願う心でなければならぬ。

私だけが幸せになっても、周囲が不幸であっては、自分の幸せを心から喜ぶことが出来ない。大衆の中に生か

される願であると感じて、大衆が幸せになったとき、始めて自分もそれを喜ぶことが出来るのである。

願共諸衆生をかかげて、同発菩提心によって、往生安楽口を願うことが、仏教の究極である。

私は、曾つて三カ年入院して生死の境を彷徨した。その時、毎日『般若心経』を一巻づつ、写経して、おのれの病氣全快を祈りつづけたのである。幾月か経ったある朝、いつものように検温をすませて朝食が運ばれてくる一時間ほどの間に、写経をすませて、その一巻を紙筒に入れながらフト、前方をみると三人が枕をならべ、又、私の左右にも病人が二人よこわっているではないか。これは今更驚くことはない。始めからこの病室は六人部屋である。

然しこの朝は、全く青天霹靂であった。それは「病人は私だけではなかった」ということだった。この病棟におびたらしい病人が、入院しているし、この世界に病める者は数え切れない。

『心経』の呪文の「揭諦揭諦、波羅揭諦、波羅僧揭諦、菩提薩婆訶」とは、「行こうよ、行こうよ、皆共に手をとって、幸せな世界に行こうよ」ではなかったのか。

それなのに、それに気づかず、自分一人の平癒を祈るとは、なんと情けないことだろうか。

そう思うと、今まで書き続けてきた写経の功法が大きな音をたてて崩れて行くようであった。私のこの偏狭さと愚かさが悔まれてならなかった。そして仏に対する慚愧の念が私の頬を涙でぬらすのであった。私は居たたまらず布団をかぶって号泣した。私は翌朝から写経を書き終えて、この功德を普く病める人達のためにふり向けて、平安の日の訪れを願うようになったのである。

仏の救いが、「念仏衆生撰取不捨」の思召による万機普益であるから、救われる側の私達も、おのれ個人の利益を祈るのではなく、われ衆生と共に、仏に救われたいと念じなければ、仏意に逆うことになるのである。

私達が周囲をわきまえずに、おのれ一人の幸せを願っても、この世をよくすることは出来ない。全体の中に存在する個人であると考えて、私達が齊しく、この世の浄化を祈り、総ての人の安らぎを念ずることが、私達のなすべき仏教の実践道である。

即ち、私一人の幸せを祈る心は、利個的であって、周囲の人に何等の影響も与えないが、仏の救いにあづかる

うと祈る者は、人の務めとして、仏心を奉戴して、仏の願行に翼賛することが、社会に大きな感化を与えて、「共生極楽成仏道」(共存共栄)の実現になるのである。

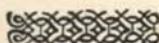
「厭離穢土欣求淨土」は、念仏信仰の基盤である。この土の穢れを厭い捨てて、淨土に往生を願うことは、この穢土を見捨てて願みないことであってはならない。

そうでなければ、淨土の教えが厭世的なものであり、現実逃避の譏りをうけかねない。「生きていく今」に根をおろしているものが往生淨土の宗教である。

私達が淨土に迎えてもらうまでは、たとえ、穢土でもこの世界に生き続けねばならない。私達がこの土にあって、真に厭い捨てべきものは、この無常の身を、彼の土に投入することだけでなく、心の厭捨を考えなければならぬ。私達は真に、厭うべきもの、捨てべきものを知らずに執着し、またそれを意識しても潔きよく、それから解脱出来ずに苦しんでいるのである。

暗きを去り、邪惡をたち切り、闘争を止める心を強くもって、ひたすら光り輝やく淨土を願う同体の輪をひろげていこうとする祈りが、念仏信者としての利益を願う心である。

浄土句集



一本の鎖の如き蟻の列

東京 鳥居 千代

評 ながながと続く蟻の列を一本の鎖と表現したのは素晴らしい。

大水車止り朝食豊の秋

福岡 高良 慈風

評 齊明天皇の朝食の宮のあたりで、大水車とは筑後川より水を引いたもの。文化財となっている三連水車も止り、ひらひらと一面豊の秋となっている。

露の身の達者自慢でありし人

福岡 上滝津弥音

評 ぼっくり死ぬことを皆願っているの

一田牛畝選



ある。達者自慢の人は願いが叶ってばかりと。如何にも露の身である。

金色の道となりけり散り木犀

福岡 荒牧 還愚

評 木犀の散り敷く道は、如何にも金色浄土とも申すべく美しいものである。

稲刈へ遠足の列喧しく

京都 安藤 寛

さつぱりと木綿の味や冷奴

東京 鈴木 葉子

踊果て夜の人出や地藏盆

東京 小笠原香祥

女郎花又男郎花日光路

東京 末常てる子

心込め父の画帳を曝しけり

東京 故阪入等達

人影のついて来るよな良夜かな

東京 新井 新生

恥つゝも吾れ晩学の秋灯

東京 栗原とも子

法隆寺人影絶えて虫浄土

福岡 原 敬二郎

なにもかも弥陀にまかせて老の春

福岡 荒牧 亀齡

雨に濡れ野菊は臥して地に咲けり

東京 細田 初枝

秋茄子を漬けし小糠に藍染まる

東京 吉田ゆきゑ

福岡 権藤みきを

雨禍の稲刈る顔きびし農夫無言

秋草を活けて客人迎えけり

東京 吉原登喜子

献灯の炎ゆれをり善導忌

山口 上野 明達

山形 松田 允子

稗粟の落ちて登校の列乱る

神宮の隅すみまでの良夜かな

東京 阪入志津枝

夕風の里に老母の無事な声

三重 森 静枝

福岡 稲永 新

頼なでる自然歩道の芒かな

長電話聞くばかりなり蟬時雨

東京 真野 竜

紅葉の層雲峽や滝の音

滋賀 松尾 郁方

神奈川 松本せつよ

朝時雨京の町行く托鉢僧

志賀直哉旧居より見ゆ霧の海

埼玉 佐久間愛子

長雨に表情変えす菊人形

群馬 島津 か寿

東京 栗原やえ子

牧水の歌碑は崖上すゝろ鳴く

初しぐれ榮枯をたづね古都の旅

三重 山田 うた

雨の日の体育祭か遣花火

山梨 青山富貴江

東京 真野よし子

山路行く独りの吾に蟬時雨

つくつくし鳴く故郷に恙なく

福岡 服部 光代

初粥を食べし嬰兒や芽木の空

山口 三井 寛静

東京 田中 秀代

山肌を被ひ尽して山葡萄

露草やふりずふらずの陶の里

福岡 三牧 重利

殿の寺晋山式や柿日和

大分 丹羽 難中

東京 猪瀬 幸子

喜びの安堵の涙ハンケチに

故里へ思ひ叶ひて秋彼岸

福岡 高良 幸代

初釜の拝領茶碗門主より

一田 牛畝

特 別 寄 稿



アンコール・ワットSOS (一)

— アンコール遺跡調査報告 —

石 沢 良 昭 いしざわ よしあき

(鹿児島大学教授)

アンコール遺跡は、カンボジア西北部のシェムリアップ市から五キロのところにある古代カンボジア王国(別名・アンコール王朝、中国呼称・真臘国)の首都ヤショダラブラ旧趾のことである。「アンコール」は、梵語「ナガラ」都・町」がカンボジア語化した呼称であり、九世紀初めから一四三二年まで王都であった。そこには往時の栄華をしのばせる数百の祠堂や石造伽藍が残存し、中でもアンコール・ワットとアンコール・トムはその代表的な遺跡である。

アンコール・ワットは、その規模があまりにも壮大で、建築様式や装飾美術の形態などからクメール芸術の珠玉伽藍といわれ、世界最大級の大遺跡である。六十五メ

ートルの高さの尖塔、数キロにも及ぶ回廊とその壁面の浮彫り、円柱窓、建物壁面を彩る舞姫アプサラの姿態と群舞、建築手法上からの幾何学的な左右対称の美しさ、約一キロの石畳の西参道を中央本殿に向って歩く時、崇高な世界へ導かれる錯覚を感じるのは、私だけであろうか。

私は、今年八月八日から二週間にわたり「アンコール遺跡破壊状況調査」を行なったが、これには記録班(日本電波ニュース社取材班六名)が同行し、遺跡の破壊、損傷、倒壊の詳細を約十八時間分のビデオ・フィルムに収録した。カンボジアでは、内戦と混乱のため、この十年間遺跡の保存、修復作業がまったく行なわれなまま放

置されてきたのであった。新生カンボジア政府は、こうした危機に直面する遺跡の倒壊を憂慮し、保守工事の再開に備えて、世界で初めての学術調査を日本へ要請してきたのであった。戦塵のくすぶるシエムリアップ地方ではあったが、軍隊に守られながら、主要な二、三の遺跡について詳しい調査を行なった。報告書はカラー写真を含めて百六十ページの分厚いものとなり、日本語、英語、カンボジア語で書かれ、カンボジア政府、日本政府、ユネ



ブノン・バゲン寺院

—中央祠堂の壁龕の女神像。
銃弾の打ちこまれた跡が見える—

スコなどの国際機関へ送付される(『埋もれた文明アンコール遺跡』の題名で二月上旬に市販される)。

シエムリアップでは、私には思いがけない邂逅が待っていた。アンコール遺跡管理事務所のビツ・ケオ所長さんが私を出迎えてくれたのであった。ブノンペンに着くとすぐ、旧友ケオさんの消息を尋ねたが、わからないままアンコールへ来たのであった。知識人のほとんどが虐殺されたカンボジアにおいて、ケオさんに再会できるとは夢にも思わなかった。むしろケオさんの生存が信じられないくらいであった。

ケオさんは、昨年十月から再開された遺跡管理事務所において、遺跡保存作業の陣頭指揮をしていた。彼は現在三十七歳、旧王立クメール大学の第一回考古学科の卒業生、高名なフランス人遺跡専門家B. ph. グロリエ教授の許で研究を続け、一九六九年には、若くして遺跡保存専門官に就任、誰彼となく話しかける気さくなケオさんは、朝夕二回広い遺跡の中を駆けまわり、作業員には必ず声をかけていた。

しかし、その翌年にはロン・ノルのクーデターが勃発し、カンボジアはベトナム戦争の中に巻きこまれてしま



アンコール・ワットの仏跡

—粉々になった破片をあつめたところ—

った。早くもシエムリアップ州でゲリラが出没し、有名なフランス人専門家が本国へ引揚げ、やむなくケオさん

が遺跡事務所長の職務を代行することになった。同僚のカンボジア人専門官は理由をつけてブノンペンへ転出してしまった。職員二十名と作業員八百五十名を掌握し、遺跡の保守工事と修復作業を継続した。やがて一九七一年一月にロン・ノル軍とゲリラがブノン・バケン遺跡（九世紀末建立）をはさんで交戦したのであった。この遺跡は高さ約六十メートルの自然の高丘上にあり、頂上からはアンコール平野を一望できる戦略上の要衝でもあった。この事態を重視したユネスコは、遺跡を戦火から保護するためのハーグ条約（一九五四年採択、軍事紛争の場合の文化財保護に関する国際条約）を適用し、中立地帯に指定するよう求めたが、戦闘は激しくなるばかりであった。

ケオさんは、作業員の人命を守るため現場に赤十字の旗を掲げ、繁茂の早い樹木の伐採を続けた。だが、一九七二年には戦火の拡大によりアンコール遺跡一帯に立入ることができなくなった。

一九七五年四月に内戦が終息し、波尔・ポト軍が進駐してきた。すぐに悪名高き強制移住がはじまり、ケオさんは職員、作業員、その家族とともにシエムリアップ市から南へ三十キロ離れた開拓地に入植させられた。波尔



アンコール・ワット第一回廊

—歴史物語回廊。この回廊に機関銃が打ちこまれた—

・ポト軍の幹部が全員の前歴を調べはじめた。名乗り出た旧ロン・ノル側の官吏・兵士・知識人などは連行されて、行方不明となった。ケオさんは前職を作業員と偽って申告した。幹部はケオさんを尋問した後、裸にして日焼けぐあいを調べ、労働していたかどうか手のひらの固さを押してみた。かつての部下だった作業員とその家族たちは、唯一人としてケオさんが所長代行の管理職にあったことを密告しなかった。幸運にも身体検査にパスして、ともかく生きのびることができたのであった。気さくな人柄のケオさんは、だから慕われていたのであった。その時の作業員たちの暖かい思いやりを述懐しながらあの忌まわしい強制労働下の生活を想い出し、涙をうかべていたケオさん、二人の子供も病死したという。

昨年一月にヘン・サムリン政権がブノンペンに樹立された。シエムリアップ地方ではボル・ポト軍の抵抗が強く、ブノンペンより三カ月遅れて住民は集団農場から解放された。

アンコール・ワットのシルエットは、ボル・ポト政権で大で国旗になっていた。しかし、遺跡の保護作業などはほとんど行なわれなかった。ボル・ポト軍の兵士たち

は、祠堂に安置してある仏像や彫像を引っぱり出し、徹底的に破壊していた。アンコール・ワットの聖池畔には、約百体ほどの石仏像が瓦礫の山となって棄てられていた。頭を割られ、首なしのトルソー、真二つの坐像、目を覆いたくなるような悲惨な仏像の墓場であった。すぐ近くには、道路に敷く砂利石ほどの大きさに打ち砕かれ、粉々になっていった。ジェノサイド（大虐殺）は仏像にも及んでいたのであった。

アンコール・ワットの回廊彫像が損傷していた。第一回廊南面西側は創建者スールヤヴァルマン二世（一一一三年ごろ—一二四五年）が軍団を従え勇壮に行進する歴史回廊である。ちょうど真中から東側にかけて、機関銃で掃射したらしく、約十数メートルにわたり浮彫りが不自然な形で剝落していた。この回廊には、歩兵・騎兵・象軍・輜軍など往時の兵団が再現され、天蓋がさしかけられた玉座から精悍なスールヤヴァルマン二世が命令を発している。また、美術・図像学上からその手法と構図の展開が高く評価されている有名な歴史的物語回廊である。こうした人為的な破壊に痛憤を感じるのは、私だけであろうか。

ブノン・バケン寺院の周辺は、たびたび戦場となったところであり、遺跡の損壊が心配されていた。東参道から急勾配の高丘斜面を登り、寺院の入口に到達するが、そこに、直径十メートル、高さ三メートルの円形の塹壕が築かれていた。保塁には経蔵や寺院の石段を壊わして積みあげていた。この寺院は一辺七十六メートル、高さ四十七メートルの大型ピラミッド様式のシヴァ神の寺院である。最上壇では五点形（ $\cdot$ ）の配置に祠堂が建ち、中央祠堂ではリングが祀られていた。その祠堂の四隅の壁龕（ぶがん）の中には、小肥りの愛くるしいデヴァター（女神）立像が安置してあるが、その女神像に銃弾が打ち込まれ、特に西南隅の女神像二体は銃撃のため剝離し、見るも無惨な姿になっていた。

これらの破壊行為はアンコール・ワットやブノン・バケンだけにとどまらない。ボル・ポト政権はカンボジアのほとんどの僧侶を死にいたらしめ、大部分のバゴダ（寺院）を爆弾で倒壊させたが、アンコール遺跡の神仏像に対する破壊が、こうした彼の仏教否定の連続線上にあることは間違いないようである。

（つづく）



念佛ひじり三國志 (下)

— 法然さゆぐさ人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

「その仔細とは何か」

住蓮は童子、いや今は完全に女体と変身した謎の人影に立ちほだかった。芳醇な香気が彼女の全身からだただよってくる。

「仔細とは……」

女の手が闇を縫うようにして住蓮の手を求めてきた。

「それは何かな」

語気がやわらいでしまうのを住蓮は自覚した。

「あなたさまに、ひと目でもお会いしたかったからでございます。いいえ、遠くからは何度もお見かけしております。でも間近で、こうしてあなたさまのお声をじかに聞いて……」

「出まかせを言うものではない」

住蓮は言葉でさえぎった。だが、握りしめられた女のやわらかな手をふりほどくことは出来なかった。

「出まかせでしょうか。だからこそ、わざわざ母上をおつれ申して、あなたさまとお近づきになる機会を作ったではございませんか」

ひたむきな「求愛」であった。

<爬虫類>



「しかし、いくらそなたがわしを求めたとて、わしは出家の身だぞ。かなわぬことではないか」

「いいえ法然さまのみ教えによれば、出家も俗者も垣根はないとうかがいました。愛し合う男女が、お互いの念仏信心を深めさえすれば愛がそのまま信心になると言うではありませんか」

「うむ」

「あたしたちは愛し合ったとて、何の罪咎（つみとが）になりましょうか」

「それは罪咎にはならない。だが、わしの方はつい今さっきまで、おぬしのことを童子だとばかり信じこんでいたのだぞ。愛し合うにも何も、わしはおぬしのことをまるで知らない」

「愛にそんな知識が必要でございましょうか。お目もじした瞬間、ハッと胸を走るもの、それだけです。住蓮さまは、わたくしをどうお感じになりましたか」

女体が迫る。すぐ眼下に白い顔が浮遊している。かすかに触れ合う下肢の感触は、何か爬虫類の肌を思わせた。つねに訴え、隙あらば毒液を刺しこもうとねらっているのだ。

「そなたは可愛い人だ。それだけ……」

「子供みたいに?」

「そうだ。今でもそなたはさっきまでの童子にすぎない」

住蓮は二歩三歩あとじさった。

「住蓮さま。わたくしが絶対無二のお念仏信者になったたら、女人として好きになって下さるのでしょうか」

「念仏を情事と、引き換えにするのか……同門の弟子にはしてあげる」

「同門のお弟子……」

「同門同志に師弟の差別はない。だが、わしの方が年上だし、法然さまからの教えも多く受けた。それを伝えるだけでも師弟という間柄になるだろう」

「お弟子になっているあいだにお師匠から好きになられたら?」

「それは、やむを得ないことだ」

「嬉しいわ。その日が来るのを楽しみにわたくしをお弟子に加えて下さい」

「それだけなら、よろしい。おぬしは近衛家で何をしている?」

「近衛家ではございません。わたくしは院に仕えています」

「院に……」

住蓮はもう一度、彼女の顔を上げしげと覗きこんだ。折からの月光が白い細おもてをくっきりと描きだした。充分に稔りをとげた女人だったことに、初めて気づいた。

「院に仕える女性(によしう)だとすると、おぬしはよもや……」

「ほほほ……わたくしは下婢でございますよ。伊賀の局さまにお仕えする小女房にすぎませぬ」

「小女房がこんな夜陰、勝手に出歩くことが許されるのか」

「今朝から宿さがりのお暇を頂戴しております。それよりも住蓮さま」

「何だ」

再び女人との距離がせばまった。女人が倒れかかるように住蓮の腕に取りすがってきたのだった。

「あなたが法然さま御門弟中、第一の念仏ひじりさまであることはみんなが承知しております」

「みんなとは？」

「すくなくとも院の殿方の間で」

院とはもちろん後鳥羽院側近をさしている。

「なぜそんなことが院の方々の間で話題になるのか」

「お念仏の信者は今、日ごと数増す一方です。ことに鎌倉武家の間で盛んに信心されています。院としても黙って見ているわけにはまいらないでしょう。法然さまがお亡くなりになったあと、御頭目になる方が問題です」

「なぜ？」

「お上にそむくように煽動したら、京の街はどうなるでしょう。再び木曾殿乱入時の混乱がよみがえります。

院をはじめ皆さまはそれを心配なさっております」

「それで」

「住蓮さまが御頭目になられたら間違いはおこるまい、と噂し合っております」

「わしだと、なぜか」

「あなたさまは長袖のご出身ではございません。だからご信心を悪用なさることは、まずありますまい。法然さまの御門中には長袖の方が沢山いらっしゃいます。この方々は何かと言うと、御生家に操られる危険がございます

す。ご信心はあくまでも純粹でなければなりません。わたくしが住蓮さまをひたむきにお慕い申上げる気持のよう」

長袖とは当時の公卿貴族の異称だった。長袖族は、背景となる政治権力に利用されて危険だ、とこの女人は強調する。

「それは、おぬしの主人（あるじ）である伊賀局どのの御意見でもあるわけだな」

伊賀局とは後鳥羽院の寵愛に集めた院内の有力者だった。住蓮は未だ会ったことはないが、鎌倉北条家の人々から聞き及んではいた。

「日中のこと、おぬしは尊長僧都と言葉をかわしていたな。暴ばれ馬のときに」

「はい」

「尊長僧都ともやはり院での知り合いだったわけか」

「あの折は、偽わりを申して……」

「いや、あのときは未だ近衛家の童子じゃったからのう」

住蓮の心はほぐれた。

それにしてもこの女人、頭の回転が鋭い。弁舌もさわ

やかで、理路整然とした口をきく。

精舎では未だ六時礼讃の合唱が継続している。月光に磨かれたこの谷間、樹々の影が深海の水草のように美しい。妙な声が流るなかで、この幻想のような夜景だ。

住蓮は、猛々しい血液が突然体内で逆巻くのをおぼえた。荒々しく女人の肩を驚掴みにすると、引き寄せていた。

女人のつぶらな瞳がすぐ眼下にあった。そこから甘美な呼吸が洩れてくる。

二

夢だ。あの霊鷲山中で体験した夢の再現ではないか。過去という時間が、現在へ混入してきてしまったのか。幻影だった鬼女が、いまたおやかな小女房に変身し、なま身の体温で住蓮をむかえ入れようとするのであろうか。

「おぬしを奪うぞ。すべてを奪いつくしてしまうぞ」

「ああ……でも住蓮さま。いけませんぬ」

絶え入るような声だ。それは男の欲情を誘さなう魔の

響きしか持ち合わせていなかった。

「何が悪い。おぬしはわしを愛していると申した。わしも今おぬしを限りなく愛しはじめている」

「住蓮さま、お放し下さいませ。これ以上抱きしめなすつてはいけませんぬ。これが……これがおわかりにならないのですか」

女の右こぶしが密着しかかる住蓮の脾腹のあたりでうごめいた。何やら硬い物体を握りしめたこぶしであった。

何——

住蓮は身をわずかに引き、小女房のこぶしを覗いた。彼女が握りしめている固形物——それは鋭い刃先が光る小刀だったのである。あと寸余、住蓮が抱擁を濃密にしたら、小女房は小刀を逆手に握りかえて男の脾腹をえぐってしまうつもりだったのであろうか。

「ひとをさんさん誘さなつておいて、いよいよとうとき刃物三昧とは何ごとか」

「申し訳ありませんぬ。さんさん誘さなつたわけではないのです。住蓮さまご自身の口から一言だけ誓いのお言葉を頂けたら、わたくしはすべてをあなたさまにお献げす

るでしよう」

「一言だけ誓い？　いったい何を誓うのだ」

「法然さま、亡きあととはあなたさまがこのひじり集団に号令をおかけになるということです。あなたさまは念佛者の御頭目になるのです」

「……」

「号令のかけかたは、すべてこのわたくしにお任せ下さい」

「おぬしの申すとおりにか」

「はい」

「それは、院の御意志をそのまま下命することにもなる」

「となるかどうか」

「鎌倉の武人どもを操ることにもなる」

ようやく住蓮の脳裏に理性が回復してきた。そのままの距離で、小女房を凝視した。

やはり現実の女人ではない。鬼女だ。霊鷲山の老いさらば山姥ではないが、老女以上に魔性をたくわえた鬼女だ。

「とは限りませぬ。鎌倉武家のことなぞお忘れ下さい、

住蓮さま。あなたとわたくしとは愛し合う仲です。愛し合いながらお念仏の信心を深めます。法然さま門中の最大の信者です。となれば法然さま亡きあとのお宗派を支配して、何が悪いのですか。みんなに号令をかけてどこが非難に値するでしょうか」

「信心がほんものであれば、非難される筋合いはない」

「そうでしょう。力が足りなければ院の上皇からお力を借りましょう。院の殿方も味方になってくれます。立派なお念仏の宗門が確立するのです」

「一つだけ聞きたい」

「何でしょうか」

「おぬしは先ほどから、しきりと法然さま亡きあとと言う。だが、お上人さまはいつ亡くなるのか。御老体ではあるがまだまだお元気だ。ご持病のおこりはあるが、あれだけのお方だ。まだ十年や十五年は御健在だぞ。お氣持がなごやかでいらっしゃる。なごやかなお人は天寿を全うされる」

「天寿は全うなさいません」

「何と……」

「法然さまは、じきにお亡くなりになります。あなたさ

まが念仏宗門のご頭目になられる日は、そう遠い先では
ございません」

小女房はきっぱりと言いつ切るのだった。

「なぜそんなことを言う」

「なぜでもです。近々にお亡くなりになる理由があるから
です」

「だから、なぜかと訊いている」

「理由は申し上げられません……住蓮さま、お上人のご
寿命はあと半年、いいえ三カ月も保たないでしょう」

「何だと！」

再び住蓮の全身で血が逆流した。

こんどの逆上は欲情ではない。諄乎たる怒りであつ
た。

あの法然お上人さまが、むざむざと死んでなるもの
か。それも、天寿を全うされないなどと。

ああいうお方こそ、阿弥陀さまは一日も長くこの現世
におとどめになって、一人でも多い教化をお命じにな
り、命数尽きた日にお迎えにいらっしゃるはずだ。

いったい誰が法然さまのお寿命を縮めようとするの
か。

住蓮は小女房の傍らから飛びすさった。五歩、六歩と
精舎の方へ走り出して立ちどまった。小女房をかえりみ
て絶叫した。

「法然さまはお亡くなりにならないぞ。この住蓮の方が
先だ。お上人さまはいつまでも生き続けられるのだ」

小女房は、この絶叫をどう受けとめたのであろうか。

樹間に白煙のように立つか細い容姿が残像となって住蓮
の網膜に泌みついただけであった。

精舎の内では未だ六時礼讃の行道が続いていた。

未だどころか。男女が発する音声は、いよいよ熱氣を
帯び、一步一步と踏みしめる行道の走は、そのまま西方
浄土へ進んでいるかのようにある。

住蓮は、さしこむ月光を頼りに安楽房を求めた。この
ひじりよりも先に、端麗な狩衣に包まれた女人のうしろ
姿を発見した。坊門局にちがいない。

安楽房は、すぐその前を歩いていた。住蓮は二人の間
へ割りこんだ。

「この別時會も今回限りで打切った方がよい」
とささやいた。

「打ち切るのか、なぜ？」

「しかとは言えぬが、何か魔物が忍びこんできている」

「魔物——」

「法然さまの身に危険をもたらす魔物だ」

「どこでそんなことを知ったんだ」

「戸外でだ。息切れがしてな、しばらく谷のあたりを散策していたのだが、この精舎を取り巻いて魔性が満ち満ちている」

「敏とい奴だな」

安楽房は笑っている。政治感覚の鋭い住蓮だ。戸外を歩いていてまた何か不安材料を感得したんだろう。その程度にしか受けとめていなかった。

礼讃に区切りがきた。行道は停止した。安楽房は指導者の立場に戻った。

「休まれるとよい。これから同唱念仏を始めるが、眠くなった者は、そのまま眠ってしまうがよい」

いつもこうなのだ。念仏合唱のうちに、みんな眠りこんでしまう。そのまま夜が明けてくる。目ざめた者から流れ解散のように精舎から引揚げてゆくのだった。

めいめい勝手な姿勢で坐りこんだ。念仏の合唱が開始された。当初は勢いのよかった唱名の声もじきに一つ落

ち、二つ消えて、力弱くなっていった。落ちたり消えたりした分は、寝こんでしまったからであらう。

住蓮は今堂内にいる人数をくり返しかぞえてみた。

たしかあの小女房と此処を立ち出る前は十七人だった。小女房が去って十六人。しかし現在は十四しかかぞえられない。

そうか、とあの松虫と鈴虫の頭巾を求めたが、どこにも見あたらなかった。いつのまにか兩人の乙女は退散してしまっただ。彼女たちの意志からではないだろう。

小女房が戸外から手引きしたにちがいない。

それにしても何の目的であんな娘ざかりの兩人を落飾させてしまったのであろうか。

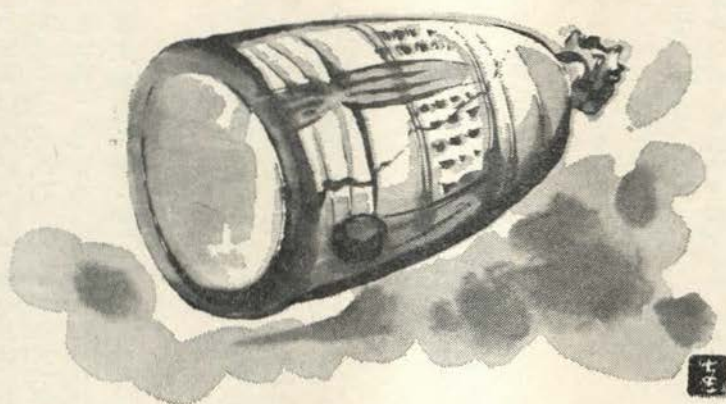
三

明遍は相変らず光堂で籠居していた。

近ごろは三論義の註釈をまとめあげようと夜昼述作に多忙だった。外出するひまもない。世が平和なのか、訪れる人もいなかった。

同一の色調がくり返されるので、月日の感覚も薄れて

<ヒビの入った釣り鐘>



しまった。

その朝、本坊から運ばれてきた朝餉を覗きこんで明遍はおどろいた。

「雑煮ではないか。なぜだ」

給仕の少年僧に思わず訊いた。相手に笑われた。

「今朝は元旦でございます」

「年があらたまったのか。それにしても昨夜、鐘が鳴らなんだが」

「鳴るわけがございませぬ。修復に出しておりますゆえ」

「そうだった」

首を伸ばして境内の鐘樓を望見した。空白だった。

釣り鐘にヒビがはいったとかで、晩秋のさる日、外ずされて運び出されてしまったことを思い出した。

箸をつけた。なかなか良くついている餅だった。

「宇治の餅か」

「はい、昨日どっさり餅米が届きました。私らで十臼もつきました。たんと召し上がれ」

宇治に父信西が所有していた庄園があった。兄弟の話合いで、そこは明遍に遺産として与えられたのである。

つまりこの光堂へ届く宇治からの米や餅は、そっくり明遍の食い扶持だった。当然、ひとりでは食べ切れぬ量なので、本坊の僧たちにも分け与えられていた。

「餅つきの響きも聞かなんだな」

「明遍さまは宵のうちは、いつもおやすみで」

述作にふけりだしてから一日の時間帯が大きく狂っている。宵に眠り、深夜起き出して燈心をともすことが多くなったのである。昨夜の餅つきもその睡眠時間におこなわれた、と少年僧は告げている。

「静かだな。鳥もやって来ぬ」

再び眼を境内へやる。

「あんなものが降り出しましたから」

晴れていたと思ったのに、いつか黒い雲に閉ざされて雪が落ちてきたのだった。

「今年は静かに明け暮れることだろう」

「そんな卦が出ておりますか」

「卦なんぞ立てはしない。感じだけだ」

「静かな年でありますように」

少年僧は祈るような眼つきになった。

「何か願いごとでもあるのかな」

「じつは明遍さま」

少年僧は境内の方へ眼をくばった。

「何だ」

「私奴、近々に還俗しようかと思っております」

「僧をやめるのか」

「はい」

十六歳か七歳、色白で眼の澄んだ端正な少年僧だった。

「何のために？ 女でも出来たのか」

「滅相もございません」

「仏道修業に飽いたか」

「いいえ、真の仏法をきわめるためにです」

「光堂においては真の仏法をきわめ得ないと申すのか」

「明遍さまは、そうは思われませぬか」

逆襲してくる。近ごろの若い者は求道心が旺盛だと感心する。それにしても真の仏法をきわめるために還俗するとは、論理が逆かさまだ。

「どこへ行って、きわめるつもりか」

「東山へ参ります」

「東山……はて、どこぞ新しい仏法があったかいな」

「法然さまのもでございます」

「専修念仏に身を投ずるか」

「はい。真の仏法は法然さまのお導き以外にはない、と聞きました」

「うむ……ただし、いきなり参って受けいれてくれるかな」

「噂ですが、法然さまはどんな悪人でもお弟子にしてしまわれるとのこと」

「……」

「盗賊もおれば罪人も、また女人ですら有髪のままです」

「噂はやや誇張してつたえられていると思うが、しかし思い立ったら実行するのも悪くはない」

「はい。やりとおしたいと思います。このままでは行く先が知れております」

「……」

多弁になってゆく少年僧の口もとを明遍はじっと見つめる。

下級貴族の末男に生まれたという、門地家柄が低いので、僧としての栄達は望めそうにない。せいぜいこの光堂で「納所」を勤めあげ、老年になって執事にでも引き

あげられる程度であろう。

栄達も望めず、真の信仰も体得できぬ未来である。とあれば、せめて信心だけでもほんものが掴みたい、というのが少年の夢らしかった。

「法然ご房なら、わしもいささか知っている。紹介の書状でもしたためてやろうか。手篤くもてなしてもらえろぞ」

「要りませぬ。明遍さま、そのような紹介状がものを言うところなら、わたしは参りませぬ。この光堂とどこが違いますか。法然さまは何ごとにも無差別。正しく信心する者だけいれる、といかがっております」

軽蔑するような視線が明遍を突き刺した。一言もなかった。そんな心構えだから、幾歳になっても信心の本体にゆきあたらぬではないか。わが身を叱りつけたい思いであった。

その元日の午後であった。明遍は珍らしい客人をむかえた。雪は朝のうちだけで降りやみ、うららかな日ざしが光堂の境内にあふれていた。

一条家の出自で、いま西面の武士の統領として権勢を振るう尊長僧都であった。明遍は白川の御所で何度か顔

を合わせている。

尊長は二人の尼僧を同伴していた。頭巾で顔をおおうてはいたが、どちらも若い。

「じつは明遍どの、おぬしにたつての頼みじゃ」

「何でしようか」

「これなる尼僧たちをしばらく預かって欲しい」

「愚僧が？」

「此処しかないのだ。これらはさる貴人の娘なのだが、親の進める縁談を嫌ってわが家を飛び出してしまった。

勝手に落飾し、これこのとおりだ」

「やはり一条家につらなる姫君たちで」

「うむ。ほとぼりがさめるまで、どこぞへかくまってもらわねばならぬ。名のある寺では、すぐに暴露してしまう。明遍どのの世捨て人。しかもこの堂内で一人暮らしだ。よもやこんな場所に、と追手に気づくまい」

「追われるような事情でもあるのですか」

「言いたくはないが、話す以上は本音を明かしておかぬとな。この尼僧、いや有髪だったころ、懸想された男とはな、主上なのじゃよ」

「主上……」

上御門その人だという。

「いたくご執心で草の根を分けても探がせ、とのご下命じゃ」

「弱りましたな。本坊は男僧ばかりで」

「なあにここでよい。しばらく、ここでひそんでおればよい。そのかわり明遍どのの身边でも世話させます」

「わしの身边なぞは……」

「へたなことだけはしてもらいたくないが。明遍どのはお固いお方、いやさ、もう女人に手をつけるお年でもございますまい」

「わかりませぬぞ。わしの兄澄憲なぞは、五十の頃を越えてから妻帯、聖覚なぞ沢山の子を作っております」

「まあ如何ようにでもお扱いなされい」

「ところで何とおっしゃる姫君たちで」

「名は明かせぬ。姉は松虫、妹は鈴虫とお呼び下されい」

「松虫、鈴虫のですか」

尊長僧都は娘二人を促し、さっさと光堂へあがりこんできた。

(くぐく)

新年賀謹

〒170

東京都豊島区西巢鴨三―二〇―一

大正大学

電話(〇三)九一八―七三一代表

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九一―二二四一代表

淑徳短期大学

学長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五―三―七

京都文教短期大学

学長 大橋俊有

〒611 宇治市槇島町八〇

◎『浄土句集』欄へのお願い

ホトトギス同人一田牛畝先生(福岡市正定寺住職)を選者に迎えての『浄土句集』コーナーは、諸方からの評判もよく、『浄土』誌の内容にささやかな華を添えています。ただ残念なことは、投句者が少しく限定されていることで、新年度よりはどうか、全国の多勢の皆様からのふるってのご投句を広くお願いいたす次第です。また「句会だより」のコーナーにも、俳談や自作の俳句などを織りまぜた随想的な一文をご投稿願えれば幸いです。

どうぞ本誌一層の充実のために、暖かいご支援をお送り下さい。

編集子 H

△俳句の送り先▽

〒812

福岡市博多区中呉服町十一―十四

正定寺 一田牛畝先生宛

新年賀謹

埼玉工業大学 松川文豪	淑徳高等学校 里見達人 〒174 東京都板橋区前野町五一四一	鎮西学園理事長 鎮西高等学校長 真和中・高等学校長 上田祐規	上宮学園 鵜飼隆玄 鵜飼光順
東山学園長 石井俊恭 京都市左京区永観堂町五一	東海高等学校長 滝俊立 〒496 津島市神守町 阿弥陀寺住職 社会福祉法人 神守保育園理事長	学校法人 芝学園 理事長 豊岡益人 学校長 徳久鐵郎	祐天寺 巖谷勝雄
松庵寺内無為窟主 小川金英 〒025 花巻市双葉町六一四 仏教福祉センターよるひる銀行	群馬教区長 野口善雄 〒376 桐生市本町六一三九八 浄蓮寺	稲田稔界	財団法人日本宗教連盟理事長 財団法人全日本仏教会理事長 浄土宗議會議員 鰐淵正浩 宇都宮市塙田 浄鏡寺

謹賀新年

無量山 伝通院 住職 大河内秀敏	九品寺住職 漆間純成 〒530 大阪市北区同心一―四―八	回向院 本多清敏 〒130 東京都墨田区両国二―八―一〇	九品仏浄真寺 清水順碩 東京都世田谷区奥沢
蓮勝寺住職 神奈川県仏教会副会長 柴田敏夫	称名寺住職 須藤隆仙 〒040 函館市船見町一八―一四 電話(〇二三八)二二―一五七八	中島真哉 青山梅窓院 〒107 東京都港区南青山二―二六―三八	教安寺住職 野呂幸進 〒210 川崎市川崎区小川町六―二 電話(〇四四)二二―一四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一 清岸寺 原口徳正	華陽院 堀田良謙 〒420 静岡市鷹匠二―二四―一八 電話(〇五四二)五二―三六七三	〒030 青森市本町一―一―一二 正覚寺 楠美知行	光運寺 飯田信弘 〒510 四日市市中部三―一二―

新年賀謹

廣隆寺住職 谷地益雄 〒045 岩手県花巻市四日町一丁目	晴雲寺住職 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六―五	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒	浮土宗議會議員 龍泉寺住職 瀧沢教夫 〒405 山梨市市川二二五―一
お骨仏の寺 一心寺 高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪上之町一五五 電話(〇六)七七一一〇三七一(代)	知恩院布教師会九州支部長 聖徳寺住職 金子貫達 〒850 長崎市錢座町四―五九	浄土宗議會議員 光明寺住職 山口諦存 〒673 明石市鍛冶屋町五―二〇	新善光寺住職 太田隆賢 札幌市中央区南六条西一丁目
浄土宗新潟教区長 照專寺住職 川端大祐 〒947 小千谷市寺町二八五―一	北川一有 長寿院 〒111 東京都台東区鳥越二―一三一―八	遍照寺住職 宇佐美諦練 〒461 名古屋市中東区泉二―一九―二三	仏生山法然寺 細井俊明 細井照道

新年賀謹

〒113 東京都文京区本郷一―八―三

昌清寺

住職 服部 仙順

電話(〇三)八二一―三三七一

檀王法林寺

だん王保育園・児童館

信ヶ原良文

京都・三条大橋東詰

光明寺住職

白幡憲佑

横浜市南区庚台(久保山)

西住院

戸川 靈俊

〒606 京都市左京区黒谷町三〇

近龍寺住職

松濤 弘道

〒328 栃本市万町二二―四

電話(〇二八二)二二一〇八〇二

芳泉寺

なぎ 柳 楽 真純
しん じゅん

社会福祉法人 大慈会・かんぎおん

〒386 上田市常磐城三―七―四八

浄土宗教学局長

法然上人降誕慶讃事務局長

大田 秀三

〒370 高崎市通町九〇 安国寺

金田 明進

〒302 取手市白山二―九―二八

弘経寺

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十七巻 正月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和五十五年十二月二十五日 印刷

昭和五十六年 一月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒113 振替東京八―八二―一八七番

新年賀謹

總本山 知恩院

門主 高 畠 寛 我

浄土宗宗務庁

浄土宗東京事務所

大本山 増 上 寺

法主 藤 井 実 応

大本山 金戒光明寺

法主 稻 岡 覚 順

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 清浄華院

法主 江 藤 澄 賢

大本山 善 導 寺

法主 宮 本 文 哲

大本山 光 明 寺

法主 石 井 真 峯

大本山 善光寺大本願

法主 一 条 智 光

法然上人御降誕地

二十五霊場第一番

誕 生 寺

岡山県久米郡久米南町里方
中国従貫道路大阪より二時間

鎌倉大仏殿 高德院

佐 藤 密 雄

〒248 鎌倉市長谷四―二―二八

滋賀 福泉寺
敦賀 西福寺

鵜 飼 隆 玄